

女性は $1.03 \pm 0.18 \text{ mg/l}$ であり、有意の差はないが、男性の方がやや高い傾向を示した。又加齢と共にやや上昇傾向を示していた。2SD の上限 29 mg/l を正常範囲とした。悪性腫瘍群60例では、 β_2 -microglobulin の陽性率は 80% であり、CEA の陽性率は 45.0%，共に陽性に検出される率は 36.7% であった。CEA と β_2 -microglobulin との間に相関関係は見い出されなかった。又 Prostata 及び Bladder tumor の14症例が全て β_2 -microglobulin 陽性であった。このことは、CEA の陽性率が高くなない症例について、血中 β_2 -microglobulin 測定を併用することは、きわめて有用性が高いことを示唆している。

29. RIA 法による前立腺酸性 フォスファターゼ 測定キットの基礎的・臨床的検討

多田 明 (市立敦賀病院・放)
中島 憲一 油野 民雄 久田 欣一
(金大・核)

前立腺癌の腫瘍マーカーとして血清酸性フォスファターゼが利用されているが、従来の L-tartrate を用いた酵素法では特異性に問題があった。今回 Mallinckrodt 社製の RIA-PA. P. 測定キットを使用する機会があり、基礎的、臨床的検討を行なった。

標準曲線については B_0/T が約 10% と低く、測定ごとの変化も認められた。intra assay は良好であったが、inter assay においては低濃度部分で悪化した。回収率試験、希釈試験は良好であった。

正常男性45例、前立腺癌15例を含む182例について P, AP を測定した。正常者の平均 $\pm S.D.$ は $0.33 \pm 0.51 \text{ ng/ml}$ であり、最高値は 1.5 ng/ml であった。正常値の決定は、良性前立腺肥大症と前立腺癌の症例で false negative, false positive が最小となる値 2.0 ng/ml とした。これによれば前立腺癌15例中12例80%で陽性となり、従来の総 Ac-P, L-tartrate 処理前立腺 Ac-P よりも感度がよかつた。

30. RIA-gnost TSH キットの基礎的・臨床的検討

亀井 哲也 山崎 俊江 立野 育郎
(国立金沢・放)

PEG を用いた RIA-gnost TSH キット (bottle type) の基礎的・臨床的検討を行なった。

結果：①特異性：GH, FSH, LH の純品を用いて抗体の特異性を調べた。GH には全く交叉反応はみられなかつたが、FSH, LH にはそれぞれ 2.9%, 3.5% の交叉反応がみられた。②再現性：キット内再現性は3種の血清で C.V. 4.3%, 8.0%, 6.6% であった。キット間再現性は 5.7%, 3.2%, 20.2% であった。③希釈試験での直線性は良好であった。④回収率：高濃度血清では幾分高目に、低濃度血清では低目に回収されたが、平均すると 106.5% と良好な値を示した。⑤インキュベーション時間：12, 18, 21, 25 時間で3種の血清のバウンドの変動は 5.5~6.1% であった。⑥インキュベーション温度：4, 25, 37°C でインキュベーションした場合の標準曲線は、4°C で平坦化し、37°C では 25°C よりも各標準血清濃度でバウンドが低下した。⑦非特異的結合：有効期限の10日前のキットの非特異的結合は 14.8% で、19日後のキットでは 28.9% と上昇を示した。⑧TSH キット第一と本キットとの相関は $r=0.96$ 、回帰直線 $y=0.81X + 0.34$ であった。⑨甲状腺機能低下症62例、甲状腺機能亢進症11例、健常人13例での TSH 値の分布を示した。本キットの正常値は、 $6.0 \pm 1.6 \mu\text{U}/\text{ml}$ ($\bar{x} \pm \text{SD}$) であった。

本キットは操作性が簡便で、臨床上、充分実用に足るものと考えられる。

31. 腎移植患者の ^{99m}Tc -DTPA による follow-up

岩田 薫 杉本美津夫 伊藤 錠一
藤川興一郎 (名古屋第2赤十字病院・放)
北村 武司 (同・内)
富永 芳博 山田 宣夫 打田 和治
両角 國男 日比 育夫
(同・腎移植センター)
高木 弘 (愛知県がんセンター・外)

[はじめに] 近年 ^{99m}Tc DTPA による標識腎スキャン剤の開発とカメラ及びデータ処理機による RI 腎シンチグラフィーが一般化されてきた。我々は生体腎移植における移植腎機能の経過観察に、 ^{99m}Tc DTPA を使用し、有用であったので報告する：

[方法] ^{99m}Tc DTPA 0.2 mCi/kg を肘静脈より bolus injection した。 γ -imager にて 2.5 sec 間隔で 60 sec まで、その後 5 分間隔で 30 分までポラロイドにおいて撮影を行なった；次に移植腎と膀胱部に閑心領域を設定し、video-tape にて集録した data を解析し、レノグラムを